

アムスルだより

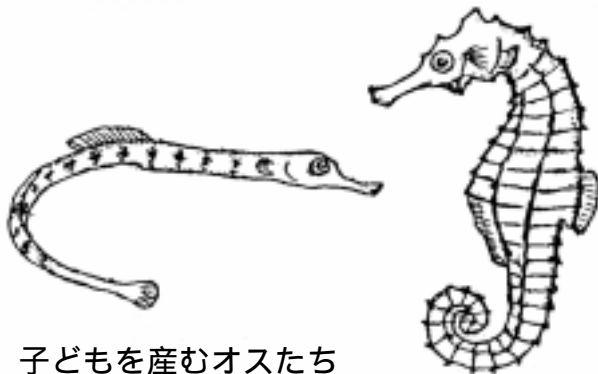
No.41 2000年 1月12日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/pb3/saburo>

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



子どもを産むオスたち

-ヨウジウオの仲間-

あけましておめでとうございます。
今年初めてのアムスルだよりは、干支
にちなんだ生き物について書こうと思
います。「辰年」ですから、もうおわかりで
しょう。今回は、ツツノオトシゴ類とその仲間、
ヨウジウオ科の魚の話です。

みなさんは、実際にツツノオトシゴの仲
間を目にしたとはあるでしょうか。間違
いなく魚の仲間ですが、これほど魚のイメ
ージからほど遠い姿をしたものも珍しい
でしょう。まず、ふつうの魚と違って、ツツ
ノオトシゴの仲間は、水の中で立ったよう
な姿をしています。動物の姿を考えると、
正式には頭から尾に向かう方向を「縦方
向」としますから、ふつうの魚は横にた
おれた格好で泳いでいるわけです。それ
に対して、ツツノオトシゴは、頭が上で尾
が下で、縦方向に立った状態でくらし
ているのです。また、ふつうの魚は、背
びれ、胸びれ、腹びれ、尻びれ、尾び
れの5つのひれをもっていますが、ツツ
ノオトシゴには腹びれと尾びれが
ありません。胸びれと尻びれも
小さなものが残っているだ

けです。ですから、泳ぐのはあまり上手
ではありません。そのかわりに、長く伸
びた尾の部分で海藻などにつかまり、
海のなかや海藻のすき間の小さな動
物を食べてくらししています。そのた
め、口も小さくて細長い形をしていま
す。ツツノオトシゴの尾は、ふだんは
前に巻いていますが、器用に動かすこ
とができ、これで頭をかくことある
そうです。今、世界には2万種以上の
魚がいるといわれていますが、その
中で尾で頭をかくことのできる魚は、
東南アジアにすむ1種と、このツツノ
オトシゴの仲間だけだそうです。

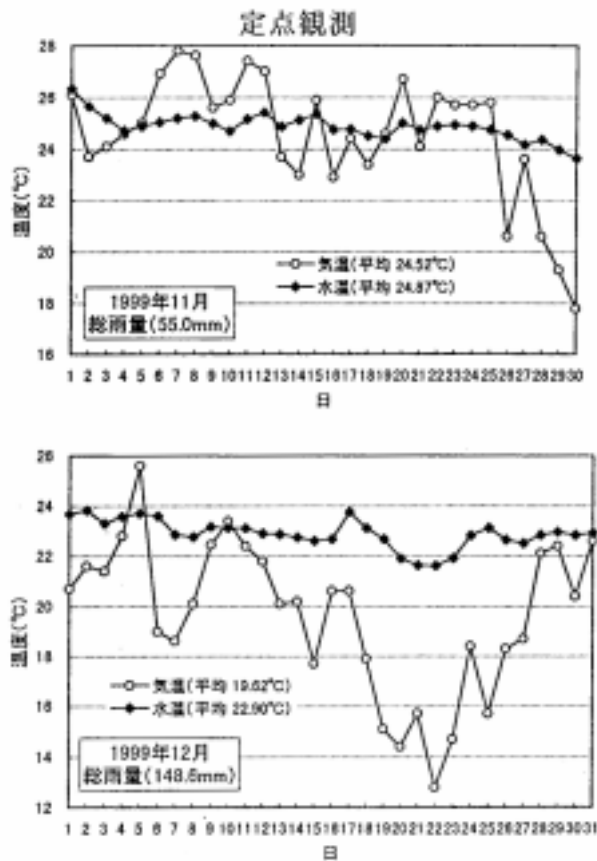
ツツノオトシゴ類は、姿だけではなく、
その増え方もとてもユニークです。ふ
つうの魚では、メスから卵が、オス
から精子が放たれ、それらが体の外
で受精し子どもが育ちます。中には、
グッピーのように体の中で卵がかえ
り、子どもとして外に放たれるもの
もいますが、この場合でも子どもを
産むのは、やっぱりメスです。ところ
が、ツツノオトシゴは、オスが子
どもを産むのです。とはいっても、
オスの体で卵が作られるわけではな
く、ちゃんとメスが卵を産みます。
少し詳しく説明しましょう。産卵の
頃になると、ツツノオトシゴのオ
スはメスを追いかけるようになり、
やがて、ちょうど手をつなぐよう
に器用な尾をからませて泳ぎはじ
めます。そして、メスはオスの腹
にある“育児のう”という袋の中に
卵を産

むのです。カンガルーのメスが、おなかの袋で子どもを育てるのととてもよく似ていますが、タツノオトシゴの場合はそれがオスなのです。しかも、カンガルーの袋の中の子どもは1匹だけですが、タツノオトシゴの袋の中では200個くらいの卵が育てられます。そうして、15~20日後、体長1.5cmほどの小さな子どもが産みだされます。子どもたちは、もうちゃんと親と同じ姿をしていて、すぐに尾でものにつかまることができます。

以前、台風の後、オオウミウマ(タツノオトシゴ類)のオスとメスの2匹が、海藻といっしょに阿嘉漁港内に流されてきたことがありましたが、この他に目にしたことがありませんから、阿嘉島のまわりでは、タツノオトシゴ類の数は、あまり多くないでしょう。むしろ、同じ仲間でもヨウジウオの方をよく見かけます。

ヨウジウオの仲間は、“楊枝”の名のとおり、細長い格好をしていて、尾びれがあり、タツノオトシゴ類に比べると、ずっと魚らしい形をしています(腹びれはありません)。オイランヨウジのような色鮮やかなものから、カムリヨウジのようなやや地味なものまで、体の色は様々です。一夫一妻なのか、1匹のヨウジウオの近くにもう1匹いることが多いようです。姿はずいぶん違っていますが、このヨウジウオの仲間も、タツノオトシゴと同じようにオスが、その腹の袋で卵を育てて子どもを産みだします。

海の中には、卵を食べてしまう他の動物たちがたくさんいます。タツノオトシゴもヨウジウオも、その卵をオスの袋の中という、とても安全な場所で大切に育て、少しでも多くの子孫を残そうとしているのでしよう。



阿嘉島の海より

-サンゴの移植実験-

サンゴは1年に1回だけ、卵や幼生を産むことによって子孫を増やしますが、ふだんは出芽や分裂によって増えていきます。ですから、台風などで折れたサンゴも、岩などに固着できれば、そこで増えることができるのです。この再生力を利用して、荒廃したサンゴ礁を回復させる方法がサンゴの移植です。今、研究所では、東京水産大学との共同研究により、どんな方法で移植をすれば効果があるのかを調べるため、阿嘉新港のとなりにあるマジヤノハマでサンゴの移植実験をしています。ダイビングのときやボートのアンカーをかけるときなどは、移植したサンゴを壊さないように注意して下さい。皆様のご協力をお願いいたします。